

資本論 第一巻 資本の生産過程
 第七編 資本の蓄積過程
 第二十三章 資本主義的蓄積の一般的法則
 第四節 相対的過剰人口の種々の存在形態。
 資本主義的蓄積の一般的法則

「資本主義における失業の不可避性」「資本主義的蓄積の一般的法則——いわゆる窮乏化論——」

労働者は、半ば就業しているかあるいは全く就業していない期間には過剰人口に属する。

過剰人口は、つねに、流動的・潜在的・および停滞的形態の三つの形態を持つ。

224 頁 11 行目

「産業循環の段階転換による、周期的反復する諸形態（恐慌期、不況期）を別とする。」
 過剰人口は、恐慌期において急性的に、不況期において慢性的に現れる。

224 頁 14 行目から

① 相対的過剰人口の流動的形態

労働者はあるいは反撥され、あるいはより大量に再び牽引されて、生産規模にたいする割合は、たえず減少しながらも、大体において就業者の数が増加する。このばあいには、過剰人口は流動的形態において存在する。（過剰人口の流動的形態）

- ・人手不足と失業者の大量発生
- ・低い賃金で従順に働く労働力にたいしてのみ大きな需要が発生し、相対的に高い賃金の労働力には需要が発生しない。（過剰人口の流動的形態）
- ・今の日本でも、「人手不足」になっているにもかかわらず、低賃金の「非正規雇用が拡大し続けている。

「少年期を脱しない男子労働者が、多数に使用されている。成年期に達すれば、大半は型どおりに解雇される。」

「女子人口が男子人口よりも急速に増加する」

「資本は、年少労働者をより多く必要とし、成年男子労働者を『より少なく』必要とする。」

「大工業の労働者こそ、もっとも短命であるのを見る。」

- ・マンチェスターでは、有産階級の平均寿命は 38 年であるが、労働者階級の平均寿命はわずか 17 年である。リヴァプールでは、有産階級の平均寿命は 35 年であり、労働者階級の平均寿命は 15 年である。

「労働者世代の急速な交替という形態を必要とする。」この要求は、大工業の労働者の早婚によって充たされ、また、労働者の児童（の搾取）によって充たされる。

224 頁 15 行目

* 「労働者は反撥（はんぱつ＝反発）され、あるいは再び牽引（けんいん）されて、」

（筑摩）「あるときには放出され、あるときには大規模に吸収され」

（法政大）「労働者を交互に牽引または斥撥（せきはつ＝おしのけ、はねかえす）する」

225 頁 5 行目には、

「型どおりに解雇される。」の表現がある。反発＝解雇ではない。「半ば就業している」状態（解雇＝失業の状態ではない）を含める。磁石の引き合い・押し離しの状況の表現か？

226 頁 14 行目から

② 相対的過剰人口の潜在的形態 （資本の可変部分に移行しうる農村にある労働力？）

農村人口の一部は、たえず都市プロレタリアートまたはマニユファクチャ・プロレタリアートに移行、転化するのに有利な時期を待っている。農村に不断の潜在的過剰人口が存在し、農村労働者は賃金を最低限度まで押し下げられ、片足はつねに貧窮の泥沼に突っ込んでいます。

「資本主義的生産が農業を占領するや否や、農村労働者人口にたいする需要は絶対的に減少する」

- ・資本主義的生産が農業を支配するや、農業労働力にたいする需要は絶対的に減少する。
- ・かくて、農村人口の一部は絶えず都市労働者への転化の機会を待ちかまえている。
- *農民層の分解は、農民の工業的生産物によって駆逐されることによって、即ち農民を都市工業生産物の買い手とすることによっておこるものである。
- *資本の労働生産性によって窮乏化された農村人口が都市に行くか農村にとどまるかは、都市が農村にある労働力に対してどれだけ需要するかということにかかっている。

228 頁 2 行目 「大農業の過剰労働者から補充される」

227 頁 14 行目から

③ 相対的過剰人口の停滞的形態

「相対的過剰人口の第三の範疇である『停滞的過剰人口』は、現役労働者軍の一部をなす。」

・その就業は全く不規則である。・その生活状態は、労働階級の平均水準以下である。「労働時間の最大限と賃金の最小限」「家内労働の主要態様」にみることができる。

・「大工業、大農業の過剰労働者から補充される。」

・「手工業経営が工場手工業経営に、工場手工業経営が機械経営に屈服してゆくという、『滅びつつある産業部門』からも補充される。」

「蓄積の範囲と精力（エネルギー）と過剰化が進むと、この過剰人口の範囲も拡大される。」

*この過剰人口は、「再生産され永遠化される。」「比較的大きな割合を占める。」要素を持つ。

*家族の絶対的大きさが、「労働賃金の高さに逆比例する。」「処分しうる生活手段の量に逆比例する。」

*資本主義社会のこの法則は、未開人・植民地人にすら、不合理に聞こえる。種の保存のための動物種族の大量繁殖を想わせるものがある。

*経済学者、聖職者は言う。

- ・貧困は生殖に好都合なもの。・神は、このような人間が豊富に生まれるように摂理（せつり＝神の意志）した。・窮乏は、人口を増加させる傾向がある。・もし、全世界が安楽な状態にあれば、やがて世界の人口は減るであろう。

229 頁 2 行目から

④ 相対的過剰人口の最下層 被救護貧民の世界

（法政大学出版局「フランス語版資本論」から）

この社会層は、（浮浪者、犯罪者、売春婦、乞食、危険な階級と呼ばれる人々を除くと）三つの部類から成り立つ。

（向坂訳——浮浪者、犯罪者、売春婦など、本来のルンペン・プロレタリアートを別にすれば）

* 第一の部類

- ・労働能力のある労働者が含まれている。・受救貧民の統計表では、恐慌のたびにまた停滞期中に増大し、事業の回復のたびにごとに減少する。

* 第二の部類

- ・受救貧民の子供や孤児が含まれている。・彼らは、一人残らず産業予備軍の候補者であって、高度の繁栄期には大量に現役軍に入り込む。（向坂訳——「現役労働者軍に編入される。」）

* 第三の部類

- ・「貧窮層」が含まれている。
 - ・分業により細部労働がなくなりいわば「廃貨（はいか＝廃止された貨幣）」にされた労働者であり、
 - ・不幸にして賃金労働者の標準年齢を越えた人々
 - ・産業の直接の犠牲者——危険な機械や鉱山や化学工業などの病人や不具者（ふぐしゃ＝身体の一部に障害のある人。⇒差別用語）や寡婦等々
- ・受救貧民は、現役労働者の廃兵院（はいへいいん＝戦傷を受けて、生活能力を失った軍人を収容した施設）であり、予備軍の死重（しじゅう＝死体が重なり合うこと）である。
- ・受救貧民の生産は相対的過剰人口の生産の内に含まれ、受救貧民は相対的過剰人口とともに資本主義的富の一つの存在条件を成している。
- ・受救貧民は資本主義的生産の空費（くうひ＝労力や時間をむだに使うこと）に属するが、資本は、この空費の大部分を労働者階級や下層中産階級の肩の上に転嫁（てんか＝罪過や責任を他になすりつけること）することを、非常によく心得ている。

229 頁 16 行目から

■資本主義的蓄積の一般的法則■

(筑摩書房「資本論」から)

- ・社会的富、機能する資本、資本成長の規模とエネルギー、したがってまたプロレタリアートの絶対数と彼らの労働の生産力、これらのものが大きくなればなるほど、産業予備軍もまた大きくなっていく。
- ・使用可能な労働力は、資本の膨張力が発展するのと同じ原因によって発展する。
- ・産業予備軍の相対的大きさは、富の力とともに拡大する。
- ・この予備軍の現役労働軍に対する比率が大きくなればなるほど、固定的な過剰人口もそれだけ大量に発生する。
- ・彼らの窮乏は、労働が苛酷になればなるほどいっそう深刻になる。
- ・最後に、労働者階級の最下層と産業予備軍が大きくなればなるほど、公認の救護貧民もまた増大する。

————— 『これが資本制的蓄積の絶対的一般法則である。』 —————

230 頁 9 行目から

- ・労働者に向かって「君たちの数を資本の価値増殖欲求にあわせるように」と説教を垂れる経済学の智慧がいかに愚かしいものであるかが分かる。
- ・資本主義的生産と蓄積の仕組みは、たえずこの数を、この価値増殖欲望に適合させる。
- ・この適合の最初の言葉は、「相対的過剰人口、または産業予備軍の創出」であり、最後の言葉は、「現役労働者軍のたえず増大する層の貧困と被救護貧民の死重（しじゅう＝死体が重なり合うこと）」とである。

230 頁 13 行目から

『社会的労働の生産性が向上するおかげで、人力の支出をしだいに減らしながら、ますます多くの生産手段を動かせるようになるという法則』

*この法則は、次のような形で現れてくる。

- ・労働の生産力が高まれば高まるほど、労働者は彼らの雇用手段に大きな圧力をかけることになり、他者の富の増殖、あるいは資本の自己増殖のために自らの力を売るといふ彼らの存在条件がますます不安定化していく。
- ・したがって、生産手段と労働生産性が生産人口よりも速く増大するという事は、資本制的には、逆に労働者人口が資本の価値増殖欲求よりも速く増大するという形で現れてくる。

*第四編、相対的剰余価値生産の分析で確認されたこと。

- ・資本制の仕組みの中では、労働の社会的生産性を高めるための方法はすべて個人労働者の犠牲のうえに立って実行されること。
- ・生産を向上させるあらゆる手段は生産者を支配し、搾取する手段へと転じ、労働者を一個の部分人間に切りつめ、機械の付属品に貶め（おとしめる＝成り下げる）、彼の労働の苦痛によって労働の内実を破壊すること。
- ・科学が独立した力として労働過程に一体化される度合に応じて、労働過程がもつ精神的な力を労働者から疎外（そがい＝人間がみずから作り出した社会関係などが、人間を支配するような疎遠な力として現出し、自己の本質を喪失した状態）すること。
- ・こうした手段は、労働者が働くための条件をゆがめ、労働過程のあいだ、彼を専制に従属させ、彼の生活時間を労働時間に変え、彼の妻子を資本のジャガーノートの車輪の下に投げ出すこと。

※剰余価値生産のための方法はすべて、同時に蓄積の方法でもあり、蓄積の拡大はすべてまた逆に、剰余価値生産の手段となる。

※資本が蓄積をすればするほど、労働者の状態は、受けとる支払い額が多かろうが少なかろうが、悪化せざるをえないということになる。

※相対的過剰人口ないしは産業予備軍が、蓄積の規模やエネルギーとつねに均衡を保つように維持する法則は、ヘファイストスの楔がプロメテウスを岩に縛りつけたよりもさらに固く、労働者を資本に縛りつける。

※その法則は、「資本の蓄積に対応する窮乏の蓄積」をもたらす。「一方の極における富の蓄積は、同時にその対極、自分自身の生産物を資本として生産している階級の側における窮乏、労働苦、奴隷状態、無知、残忍化と道徳的退廃の蓄積である。」

※資本制的蓄積のこの敵対的性格

・ブルジョアジーの運動の基盤をなす生産諸関係が統一的で単純な性格をもっておらず、分裂的な性格をもっているということ。・富が生み出されるのと同じ諸関係のなかで、貧困もまた生み出されるということ。・生産力が発達するのと同じ諸関係のなかに、抑制的圧力を生み出す力もまた存在しているということ。この諸関係がブルジョアの富、すなわちブルジョア階級の富を生産するさいの唯一の手段は、同時にブルジョア階級に属するメンバーの富をたえず破壊し、ひたすら増大しつづけるプロレタリアートを生産すること、等である。

232 頁 13 行目から

* ヴェネツィアの僧は、資本主義的生産の敵対関係を、社会的富の一般的自然法則と解する。

「経済的善と経済的悪とは、一国民の内ではつねに均衡を保ち、ある人々には財が豊富であることは、つねに他の人々にとって財が不足していることに等しい。ある人々の大きな富は、つねにはるかに多数の他の人々の必要物の絶対的掠奪（りょうだつ＝奪い取ること）を伴う。一国の富は、その人口に対応し、その貧困は、その富に対応する。ある人々の勤勉は、他の人々の怠惰を強要する。貧者と怠惰者とは、富者と勤勉者との必然的果実である。」等々、云う。

* 新教の牧師は、全く粗野なやり方で、貧困を富の必然的条件として賛美した。

「労働の法律的強制には、あまりに多くの煩勞（はんろう＝わずらわしい骨折り）と無理と物議とを伴う。飢餓は、平和で無口で、絶えることのない圧力であるのみではなく、勤勉と労働とへのもっとも自然的な動機であり、努力の心呼び起こす。」すべては、労働者階級のあいだの飢餓を永続的なものにするに懸って《懸る（かかる＝依存している）》いる。

* タウンゼンドによれば、とくに貧民のあいだに働いている人口原理の取計らうところである。

「貧民がある程度まで無分別であって、（すなわち、金の匙（さじ＝スプーン）をくわえないでこの世に生まれてくるほど無分別であって）そのために公共社会のもっとも下賤、不潔、劣等な役目を果たす人々がつねに絶えないということは、一つの自然法則であるように思われる。人類幸福の基は、これによって非常に増され、もっとひよわい人々は、労苦から免れて、より高尚な職務に支障なくたずさわることができる。」「救貧法は、神と自然とがこの世に設けたこの制度の調和と美、均斉と秩序を破壊する傾向がある。」と云う。

* ヴェネツィアの僧は、貧困を永遠化する運命の定めの中に、キリスト教的慈善や独身や修道院や聖堂やの存在理由を見出したが、新教の牧師は反対に、僅かばかりの公の補助を受ける権利を貧民に与えた法律を非難するための口実を見出すのである。

* シュトルヒは言う。

「社会的富の前進は、かの有用な社会階級を産み出す。この階級は、もっとも退屈で、もっとも下等で、もっとも厭わしい（いとわしい＝いまわしい、おぞましい）仕事を行い、一言で言えば、人生の不快なもの奴隷的なものとのすべてを、自分の肩に担い、他の階級のために余暇と精神の清澄（せいちょう＝澄みきっていて清らかなこと）と習俗（世の中の習慣、風習）的な品格とを作り出す」

* シュトルヒは自問する。

「民衆の貧困と墮落とを伴うこの資本主義文明が野蛮にまさる長所は、そもそも何か？」

「安全」という答えを見出す。

* シスモンディは言う。

「労働者は、自分の消費に要するよりもはるかに多くを、日々生産しうる。もし、この富を彼が消費すべきものとされるならば、この富は、彼を労働に適しないものにする。」

「芸術の完成も、産業が与える享樂も、労働者の不断の労働をもって購（あがなう＝あるものを代償〈本人に代わってつぐなうこと〉して手に入れること）わねばならないものとすれば、人間（すなわち非労働者）は、これをすべて断念するであろう。……努力は、その報酬から分離されている。同じ人間が労働して、休息するのではない。そうではなく、ある人が労働するからこそ、他の人は休まなければならない。……したがって、労働の生産諸力の無限の増大も、無為な富者の奢侈（しゃし＝度を過ぎてぜいたくな）と享樂（きょうらく＝思いのままに快樂にふけること）の増加以外には、何の結果ももたない。」

* 最後に、冷血なブルジョア理論家は、無情にもこう宣言する。

「貧国とは、人民が安楽に暮らしている国であり、富国とは人民が一般に貧しいくにである」と。